



佐世保の戦国時代を生きた女たち

今回は佐世保の戦国時代を生きた女性達について考察しようかと思います。男性に比べると古書などの記述が少なく、その人物像までを見いだすのはなかなか難しいことで、現時点で私の知る比較的掘り下げて紹介することができそうな人物を何人かピックアップしました。しかし残っている記述も少ないため、多少の想像を交えての紹介になることをご理解ください。

さて、これまで戦国時代の女性と言えば政略結婚の道具にされたあわれな女性達というイメージでとらえることも多かったと思うが、どうもそのイメージだけで当時の女性をひとくくりに考えるのは間違っているようです。

中世、得に西国日本女性をヨーロッパ女性と比較した貴重な記録があります。16世紀半ばに日本に来た宣教師ルイスフロイスの手によるものです。フロイスと言えば1563年(永禄6年)に西海町の横瀬浦にきて布教活動を始め、肥前の戦国武士達と顔を合わせていると思われ、その後、織田信長や豊臣秀吉とも謁見しています。

当時の日本の様子をつぶさに記録している「日本史」は第一級の貴重な歴史書であり、その中でフロイスは日本女性は離婚・再婚がとても多いことや、離婚されても女性は名誉も失わないし、再婚も出来ること、また妻のほうから離婚することもできると記しています。キリスト教は離婚を厳しく禁止していたし、中世ヨーロッパの女性には離婚権がなかったから、フロイスの驚きはそうとうなものだったのでしょう。

とはいうものの、男たちが支配政権を築いていくこの室町・戦国時代は間違いなく前代の鎌倉時代よりも家父長権の深まった時代であることは間違いなく、その両面から見なければ当時の女性の姿も正しくはとらえられないかと思います。

普段クローズアップされることの少ない戦国の女性達をあえてピックアップし、戦国の女性像を明確にすることで、佐世保の戦国時代の違った一面も出てくるかもしれません。今後のこの分野の調査の発展を期待します。



南殿または川内殿 お家存続のため生きた強き母。



多美野 波瀾万丈の夫を影で支えた続けた妻。



18代定の室 家柄を超えて結ばれた名家の娘。



高麗媼 異国の地で神となった豪気な女陶工。



白縫姫 蛇島伝説に登場する悲劇のヒロイン。



速来津姫 肥前風土記に登場する豪族・土蜘蛛の長。



なん南かわうち殿 または川内殿 まさし宗家松浦15代 しょうにまさすけ政の正室／小貳政資の娘

1477年	北九州の名門少貳氏当主小貳政資の娘として生まれる。
1493年頃	大智庵城主・宗家松浦15代当主 政のもとへ嫁入りする。
1494年 (17歳)	跡取りの幸松丸を出産。
1498年 (21歳)	大智庵城が夜襲され一夜にして落城する。 15代 政は討死。子の幸松丸と共に人質となり平戸へ連れて行かれる。2人は白狐山城(びゃっこさんじょう)近くの川内村の平戸家の別館に住まわされた。そのため南殿はこののち平戸家から川内殿と呼ばれるようになる。 一説には時の平戸当主の弘定の嫡男である興信がこの川内殿の美貌と気品高さに圧倒され、家臣の井関兵部が訴える幸松丸の殺害計画を許さなかったという。
1499年	その後、今福歳宮の祭礼参拝の時に宗家松浦の家臣により助け出され、有田の唐船城に幸松丸と共に身を置く。そこで16代当主として幸松丸を養育する。
1515年	大智庵城を攻めた弘定が没する。 この時期、幸松丸は元服し「丹後守親」と名乗る。波多興の娘を室とした。また平戸の興信が波多興の二女を後室としたことで両家の関係は一時的に良くなった。
1531年 (54歳)	宗家松浦の旧領回復。相神浦の地に30数年ぶりに復活を遂げる。 この復活劇の裏には「南殿」の存在が大きく働いている。室町幕府が平戸方に宗家松浦に旧領を返すように命じるのだが、それを斡旋したのが「南殿」の弟である小貳資元だった。資元は当時、肥前国守護であり、大きな力をもっていたのである。 ところで、この時期が「南殿」にとっては、やっと訪れた平穏な時だったのかも知れない。戦乱の渦中ではあったが、息子も宗家の16代当主として成長し、上松浦最強と云われる波多氏とは友好関係にあり、肥前国守護である弟も健在だ、なにより長年いがみ合ってきた平戸とも今は良好な関係にある。
1535年	この年、相神浦に飯盛城を完成させ宗家松浦の完全復活を遂げる。 同年、宗家松浦が後ろ盾としていた小貳資元が自害してしまう事件がおこる。
1541年	平戸の興信が没する。 12歳の隆信が跡を継ぐ
1542年 (65歳)	第1回飯盛城攻め 跡を継いだ隆信が動き出す。隆信は当時まだ13代の若君だったので家臣達の後押しがあったかもしれない。 平戸軍は大軍を率い飯盛城に迫るが宗家松浦の堅い守りを破ることはできなかった。 平戸軍を退けた息子は今では宗家を受け継ぐ立派な当主となり、宗家松浦は相神浦の地で全盛期を迎えていた。
1548年	弟である小貳資元の13回忌に供養塔が建立される。
1550年	1550年(天文19年)12月 宗家松浦全盛の最中、享年73歳で息を引き取る。 墓は新田町の竹林寺跡地にある。

若くして宗家松浦の若当主に嫁いだその数年後には主人を亡くし居館をなくし、人質の身となってしまう。一度は途絶えかけたお家の跡取りである大切な幼子の命を守る為に我が身を捧げた人生だっただろう。その甲斐あってか、息子の幸松丸は宗家松浦歴代当主随一の名君「丹後守親」となり今にその名を残している。「丹後守親」は母が亡くなったその年、墓を飯盛城がよく見える丘の上に建立する。そしてその3回忌にあたる3年後に同じ場所に自分とその室の墓を建てている。私には母が寂しがらないように自分の逆修碑を側に建てた様な気がしてならない。この親子の絆が特別のものだったことがうかがい知れる。



たみの **多見野** そうきんちかし 16代宗金親の正室／きしだけ 波多氏15代当主(岸岳城主)はた こう 波多興の長女

1500年頃	唐津の波多氏15代当主(岸岳城主) 波多興 の娘として生まれる。
1515年	宗家松浦16代当主「 丹後守親 」のもとへ嫁入りする。
1536年	父親である 波多興 の供養塔が建立される。(新豊寺跡地)
1535年	相神浦に飯盛城が完成する。「丹後守親」や家臣などと共に入城する。
1563年	平戸の 松浦隆信 が飯盛城を攻める。 多見野の人柄がわかるような一説がある。 飯盛城の戦いは決着がつかず3年が過ぎようとしていた。「丹後守親」はこれ以上の籠城戦は領民が苦しむばかりと考え、和睦への道を模索していた。そこで多見野は敵陣の大將である隆信の元へ密かに向かうことにした。多見野から見れば隆信は妹の息子であり、話せぬ相手ではないと思ったのかも知れない。密談の結果、隆信の三男九郎を宗家の養子に迎えることでこの戦いも終結したという。(松浦党研究No.30「徳川時代の今福松浦宗家について」より)
1577年	1577年(天正5年)9月17日卒 墓は竹林寺跡地(新田町)にあり 法名:覺庵殊心大姉 卒した時の年齢がよく分からないが、亡くなった年から一般的に考えると、1515年に14歳、15歳で「丹後守親」のもとへ嫁ぎ、亡くなった歳は76か77歳くらいだろう。「親」と共に当時としては長生きだった。

「丹後守親」は多美野の死から6日後に後を追うように息をひきとっている。母の「南殿」といい、この正室の「多見野」といい、「丹後守親」の功績は優れた女性の支えがあつてのことだったのかもしれない。

さだむ **18代 定の室** 宗家松浦18代当主 定(1571～1593)の室 秋月家(筑前)16代当主 秋月種実(あきづき たねざね)の5女

宗家松浦18代**定**は平戸松浦家が**豊臣秀吉**に差し出した人質として堺に上った3年間の間に、同じように筑前の**秋月種実**の娘で豊臣家に奉公に出ていた女子と出会い結ばれる。

当時、平戸松浦家と秋月家とは付き合いがあったと考えられず、また、定も平戸松浦家の嫡子でもない身分。詳細は伝えられていないが、家柄など関係のない恋愛結婚だったのかもしれない。しかしこの時代の恋愛結婚は考えにくく、豊臣秀吉が縁組をしたという説もある。

その幸せもつかの間、定は秀吉の朝鮮出兵の際に23歳の若さで平壤にて討ち死にしてしまう。事実上宗家松浦氏はここで断絶する。しかし二人の間には一人息子がいた。名を「**信正**」と云い飯盛城を出て平戸で養育される。そしてその信正の子「**信貞**」の代に家の再興が許され今福の地にて再興する。現在、定とその室の墓は二人共に並び金照寺に祀られている。



こうらいばば

高麗媼

日本名:中里エイ 朝鮮の釜山近くの熊川生まれ

～豊臣秀吉がおこした文禄・慶長の役では、各大名が朝鮮から多数の陶工を連れて帰った～

1598年
(32歳)

「巨閑」などの陶工たち100人程と共に平戸の松浦鎮信によって平戸へ連れてこられる。
陶工たちは大膳原に住み、そこを高麗町と呼ぶようになった。
「巨閑」と「高麗媼」は平戸の中野村に窯を開き、陶器を作り始める。
やがて「巨閑」はの籍に入れられ今村姓を名乗り、「高麗媼」は里人の中里茂右衛門の妻となり中里姓(中里エイ)になる。

1613年
(47歳)

男子を出産する。
この時の年齢は47歳で高齢出産だったが、身体も強靱な人物だったのだろう。

1622年
(56歳)

夫の死後、子どもを連れて唐津の椎の峰に移り、さらに折尾瀬村の三川内に移り住み窯を開く。

1629年

三川内に移った「高麗媼」はこの年灰色焼を創案。

1634年
(68歳)

更にこの年朱泥焼を創案。
製陶技術もさることながら経営手腕もあり、多くの弟子を抱え、三川内焼の陶業をおこした。
「高麗媼」という呼び名はその当時につけられた愛称。

巨閑の子今村三之丞も、のちに子どもを連れて三川内に移り住む。

「高麗媼」を祖とする中里家と今村家が三川内焼の開祖となり、「高麗媼」は釜山大明神(釜山神社)、三代目「今村如猿」が如猿大明神として陶祖神社にまつられている。
のちに「今村如猿」は功績を称えられ平戸の殿様に禄を与えられたが、高麗媼親子は辞して平戸へはいかなかったという、権力に媚びない真の強さをもった女性だったようだ。

1672年
(106歳)

106歳で卒する。
死ぬまでニム子(ね)明神という焼物釜の神を祭っていた。死ぬ前「自分の死体を焼く煙が天に昇って朝鮮の方へ行けばこの祭りをやめて新しい山の神の宮を建てよ、もし煙が地に這えば長くこの宮をまつれ」と言った。煙は地に這い宮は残った。高麗媼の靈魂も三川内にとどまることを選んだのだろう釜山神社に今も祭神として祀られている。
過酷な運命を悲観することなく異国で花開き、ついには神となったその生涯だった。

中野村の土に見切りを付けていち早く三川内に陶土を求めたのはなかなか先見の明があり、自分の製陶の技術もさることながら経営手腕もあつたらしく、筋の通った



高麗媼 子孫のお墓



釜山神社

白縫姫しらぬいひめ 赤崎伊予守の正室／遠藤但馬守の娘

伝説と史実との相違点



白蛇が出たといわれる岩穴
将冠岳の山頂にある「岩姫様」



蛇島伝説(白縫姫伝説ともいわれる)

時は戦国時代。佐世保城主遠藤但馬守に一人の美しいお姫様がいました。すんなりと美しいその姿は城中の花とたたえられ、赤崎岳の城主赤崎伊予と許嫁の間柄で、嫁ぐ日も間近でした。

ある日のこと、但馬守の主にあたる相神浦飯盛城の城主松浦丹後守親が、烏帽子岳の狩りの帰りに但馬守の館に立ち寄りしました。丹後守親は佐世保の領主ですから、但馬守は早速祝宴を開き、姫を舞わせてもてなしました。親は蝶が花にたわむれるように舞う姫を見て、一目で恋をしてしまい、「姫をぜひ嫁にしたい」と言い出しました。こまった但馬守は、姫には許婚者がありますのでとことわりしました。しかし親はどうしても姫をあきらめることができません。

恋に目のくらんだ親は、平戸城松浦隆信に「但馬守は佐賀の龍造寺とむすんで、平戸をうらぎろうとしている」とうったえ、館をおそう計画を立てました。

ある夜、とつぜん響くほらの音、軍馬の響き。但馬守の館はたちまち親の家来達に囲まれてしまいました。激戦のあと、ある者は倒れ、ある者は傷つき、館はみじめなようすになってしまいました。戦いなかばに、父の負け戦をさとした姫は、裏道を通って将冠岳に姿を消しました。親の家来たちは、われこそ姫を捕まえてごほうびをもらおうと、血眼になってさがしました。将冠岳へも三十人ばかりがあとを追いました。夕方、家来たちが疲れ果てて山の頂に横たわっていますと、すぐ下の谷から白い煙が立ちのぼるのが見えました。家来たちはそれとばかりに駆けおりました。

大きな岩穴の前に来た時、彼らはアッと声をあげました。姫が姿を消した岩穴から、大きな白蛇が真赤な口から白煙をはきながらスルスルとはい出てきたのです。

鋭い目つきでまわりの人々をちぢみあがらせながら、蛇は将冠岳をくだりました。やがて佐世保のあたりまでくだと海に入り、赤崎の伊予守の館を目ざして、泳ぎ渡っていきます。しかしその姿は途中の小さな島影に隠れたところで、ぷつりと消え二度と現われませんでした。これを見た人々は、姫の赤崎伊予守をおもう気持ちが白蛇となって、恋しい伊予守のいる赤崎館に向かって泳いで行こうとしたが、かつきてこの島で命つきたと思いました。このあと人々は、この島を蛇島とよぶようになりました。

昭和63年 佐世保市立図書館発行「ふるさと昔ばなし」より

以上が一般的に伝えられている白縫姫の物語です。伝説とはいえこの物語に登場する武士達はすべて実在した人物で、古書にも度々登場する人物です。

白縫姫という名前は文献には見あたりませんが、どうやらモデルになった人物がいたようで、物語のあらすじも残されている文献と違いはありますが、大筋は同じです。

次へ



印山記(松浦旧記古書)より ※大幅に省略しています

遠藤但馬守の龍造寺への内通の噂を聞いた但馬守の女婿である赤崎伊予守は但馬守を説得をしたが、聞く耳をもたなかったため、このまま遠藤に属すれば自身も主君に背くことになり不利な状況になると思いから、但馬守の企みをありのまま築地六左衛門に話し、連れだって平戸の松浦隆信のもとへ報告に行った。

すぐに遠藤但馬守とその長男右近、次男弥五郎の誅殺命令が内密にだされ、それぞれの場所へ追っ手が向かい、結果、全員が殺されてしまう

印山記にはその誅殺の様子が生々しく描かれています。

「遠藤の女聲(むこ)」と書かれているこの娘こそが「白縫姫」だと思われます。しかしこれ以降、古書に「白縫姫」と思われる人物はでてきません。一時期は佐世保の半分を領していた赤崎伊代守は館を赤崎山から中通りに移し、晩年は相神浦の小川内に隠棲し、そこで病死しています。この間の記録にも赤崎伊代守の室の話はなく、もしかして早い時期に何かしらの原因で亡くなったのかもしれませんが。

憶測ですが誅殺事件の時点で娘も殺されたのではないかとさえも思います。そうだとすると赤崎伊予守は大悪党になり、話は伝説より更に悲惨な結末になってしまいます。

遠藤・赤崎ともに佐世保を二分する勢力をもつ武将でした。赤崎伊予守は海賊退治の伝説ものこる地元民には愛された武将でありましたが、今では遠藤但馬守のほうが供養塔なども多く残され市民に親しまれているかんがあります。それもこの事件があったからだと思われ、遠藤亡き後、佐世保城主となっていることなどからも赤崎伊予守には常に不穏な影がつきまっています。佐世保を代表する武将の遠藤但馬守と赤崎伊予守の生涯は、大変興味深くおもしろいので詳細はまた調査してまとめてみたいと思います。

この事件の2年後、平戸から養子としてやってきた城主九郎親が東甚助時忠という家臣と刺し違えるという事件が起きています。「壺陽録」によるとこの事件は九郎の家臣山口が自分の土地ほしさに領地持ちであった東甚助兄弟をおとしいれようと、匿名で嘘の書を送り、それを信じた城主の九郎親は東甚助時忠を呼び出し、殺そうとした際に、刺し違えとなり両者ともに死んでしまったということです。

2つの事件を重ねて考えるとあるひとつの答えが浮かびます。

勝手な憶測ですが、両事件共に黒幕は平戸松浦家ではないでしょうか、平戸松浦家にとって驚異となりうる存在を何かしらの理由を付けて消していった感じがしてなりません。歴史とは常に勝者のものであるとよく言いますが、「遠藤の龍造寺内通」の話も「山口の匿名で嘘の書」の話ものちにつくられたもので、佐世保の南部を領し力を付けていた遠藤家と宗家松浦時代から武勇を重ね力を持っていた東一族はひょっとして平戸松浦家にとっては目の上のたんこぶだったのかもしれませんが。

赤崎伊代守は男子2人女子2人の子供がいたことが孫にあたる平戸藩家老の瀧川弥一右衛門の家系図によって分かっています。それが遠藤の娘との子なのか、もしそうだとしたら、自分の親と弟を殺した男の子を産むだろうか、また事件の前に子供が産まれていたとしても、そんな男といっしょにいれるのだろうか？現在の常識では当時の人の心境は計り知れません。

しかし伝説、史実、どちらにしても遠藤但馬守の娘で赤崎伊予守の室だった娘(白縫姫)は悲しい運命をたどったことに変わりはないようです。